歌枕名寄　二

總紀

貳

内閣文庫
和書　類
三四六七四號
三九冊
三〇二函
四架

内閣文庫
番號　和 34674
冊數　39（　3）
函號　202　121

国立公文書館
National Archives of Japan

歌枕名寄巻第二

畿内部二

山城國二

大原篇

清和井水　朧清水　八瀬　小野

上野　芹生里

嵯峨篇

野宮　大澤池　廣澤池　大井河

戸難瀬　桂　亀山　嵐山

小倉

編脩地誌備用典籍

大原篇　山河里

万四　續古十三
大原(オホハラ)之(ノ)此(コノ)市(イチ)柴(シバ)乃(ノ)何時(イツ)鹿跡(シカト)
吾(ワカ)念(オモフ)妹(イモ)尓(ニ)今夜(コヨヒ)相(アヘル)有香裳(カモ)
田原天皇

詞花八
君すまふ跡ふるわいつかたかや
いつしかとのこころやまつ
左京相如

月十
大原やまたすみかまもならはねは
わかやとのみそけふりたえける
良暹法師

増古
さひしさハ色もかはらぬ大原や
庵くまそこの海のをちかたの
成仲

千五百番
大原やこころくまなく炭かまの
冬かりはひとりけふりたつ雲
隆信

新勅六　西行
大原はひらのたか嶺のちかけれは
雪ふるほとを思ひこそやれ

百首四季　土御門院
よそにてもさひしとはしれ大原や
すみかまをたえぬ烟の里

新六　信実
大原はゆきてや見ましいつしかと
さくらちるとの花はちるらん

山

後拾六　和泉式部
こりつみてまきの炭やくけをぬるみ
おほはら山の雪のむらきえ

同十七　藤原国房
さひしさやこゝろえてこそさひしけれ
おほはら山の林乃ゆふくれ

同廿　読人不知
こゝろさしおほはら山のすみかまは
思ひをそへてたくにそありける

増　左京大夫顕仲
何事をおほはら山にすみこめて
つきせぬ麻のころもあらまし

新古十七　和泉式部
世をそむくかたはいつくもありぬへし
大原山はすみよかりきや

同廿　少将井尼
おもふこと大原山のすみかまは
いとゝなけきの数をこそつめ

河

拾九　恵慶法師
世乃中にあやしき物は霜なれと
大原河のひろくそありける

右詞云雨ふりける日大原河をまかりわたり
侍るにぬれつゝまかりけれハとこそ

里

付古郷

万二
吾里爾大雪落有大原乃
古尓之郷尓落巻者後　天武天皇

同十一
大原のふりにし里に妹をおきて
われいねかねつ夢に見えこそ

増
さまへくつま木とりくへきこの夜よ
けふりもたえぬ大原の里　公実

同
深山木をこりくもこゝ竈まこり流して
けふりたえせぬ小野なる里　肥後

千五百番
冬されはをのゝやくとも煙みゆれ
きかりよきさにおほのゝ里　俊成

同　新拾六
ねやの雪また人かよふことたえぬ炭焼の
けふりハかりしねおほ原なる里　讃岐

新古六
日数ふる雪けにまさる炭竈乃
けふりもさひしおほ原の里　式子内親王

あはれさハかうやと君も思ひしれ
秋くれかたのおほ原乃さと　寂然法師

ひとりすむおほろの清水友とてハ
月をそすますおほ原の里　同

右二首寂然大原に住侍りける時

堀川院後十
五首
西行百
六帖

よか西川山やまとはよしとまつらに
をきて十こゝそよみてつらしたら返るも
よ大原の里にいふしを下の句よまさ
て又十首をよミそてつら子とゐん
贈りまのさかりハ宮まえ立ちいく
そうしたさうく我かきうれさと　権大納言経継
朝ゆふのさかりりかをあらはまて
人ハまさせぬ我ほとりのさと　小侍従

清和井水　一説在西大原云々

おかりしやせ井の水をまよくみて　ひさこうて　神楽
とりハなくさむあらひそゆる心

千五百番歌合
五月雨

まさぬれていりあそれとん五月雨も　顕昭

勝清水

せゝ井の名も岩こしてまかり

或云勝目寺枕西大原也云々而古人西勝多在小大原

良暹法師大原にこもり居ぬと聞て

後拾十七

はつかしき
水くきのあとかたの志水底きよて
こゝろは月乃影もうつりや　素意法師

同返

夜くさそ月をうつらん我か見や
たゆみの清水むすふなりそ　良暹法師

堀百

八重むくらしけきの下に結ひて候
我か孫乃清水夜ま志られ出　匡房

金七

わか恋ハおほはらの清水いはでのミ
せきやるかたもなくてくらしつ　俊頼

続古十六

入月乃おほはらの清水いかにかく
つゐにはすむへき影とおもはん　順徳院

右一首撰者説ニ於テ大原乃
おほろけならぬよしきこえけれハここに

新拾十八

大原やおほはらの清水くミてしれ
心すむらんもしへぬる身を　読人不知

月も今おほはらの清水すれぬらん
面かわり世る世ともまちける　中納言雅具

里

夫木八

まれにこそおほはらの里に住なれて
庵もしつかにあはれなりけり　忠度

山

同五

あかつきも明けはなれゆくおほはらや
月もおほはらの山乃はれのこる　家隆

八瀬

増古

おほはらへゆくてたちまちたちまちれて
やせにとまりぬる桜散けり　清輔

小野

山　畠　里　道　渡　篠原

大原や小野のすミかを夜雷ふりて
こころひかけはまつそかなしき　師兼

續古

大原や小野の炭竈雪ふれは
たえぬけふりそれとしられけり　仲実

同

小野山の名はきしたなりまゝに
をのゝすみかま煙たちけれ　紀行

同

須磨の浦は塩屋くあまの烟をも
見えかへはるゝ小野乃炭竈　河内

拾十七

深山木をあさな夕なにこりつめて
さむさをこふる小野の炭やき　好忠

都ちかき小野大原を思ひ出る
しはのけふりのあはれなりけり　西行

亀山殿七百首

とたえやはをのゝ炭竈をのつゝ
かよひ路はたえ雪つもるとも　前大納言經繼

述懐百首

煙たつ小野のすみかま我なれや
なけきをこりつみて下にもえなん　俊成

千五百番

さひしくは冬こそまされ小野の里
雪ふかき日らをもなきかよひち　家長

同

さひれたる煙の跡さへたえても
雪ふかき日らをものかよひち　保季

同

をのゝさとは山風さえて吹くゝ小
こやこ人いかゝ小野は住やさき　文恵

續古

山

住まほしきをのゝ山へは霞こめて

雪

米つもる海人やまよりくる　肥后

堀 仝

炭竈よりけふりさへ小野山は
雪きのやまと見ゆるなりけり　師時

月

炭かま乃くちやおくらんをの山は
たゝかりのさくたちのかゝれ　隆源

後拾

みやこにも初雪ふれは小野山の
まきの炭竈たきまさるらし　相模

仝

初雪は槙乃葉志ろくふりにけり
こやをの山乃冬のさひしさ　経信

続古六

小野山や焼く炭竈にこりつみし
ながれも木とくもよつもるらん　俊成

住吉社百首

きこりのおれかゝりよま煙たちこめて
よそめうすめる小野の山かけ　為家

小野山は麓もとらぬ海乃下もえて
けふりのうへはつもる白雪　安嘉門院四条

新勅廿

山田

大かたは小野の山田つくりかね
たのまれ君ならではしる人や　俊頼

右大かをとりて見るやと以打句の

畳冠也

古来年合

さと人は小野の山田いまよりや
冬ごもりせぬ孫乃さかへさゝん　鷹司院帥

里

金二
卯花
雪乃色をぬすみてさける卯花は
をのゝさと人冬こもりすれ　公実

増六
炭竈のたこともなくしき山里に
たえてやかん小野のさと人　肥季

同
炭竈にたき木こりつゝ夕ぐれは
をのゝ道まで山ふかき小野の里人　基俊

新後下
康
麻の衣とこそはつけても住人の
こゝろすみぬる小野乃山さと　西行

同六
降雪にゆきゝの跡もたえはてゝ
いくらふかゝぬ小野のさと人　祐盛法師

増十
山の雪は小野の山里ふかからし
たれかはけさ乃あとつけなるらん　堀河院中宮上総

道　古ー細ー

万代
志ら露はたえぬ秋まきやすく
袂なる小野の古道をあるし　純信

阿宜集
卯花のおりもや人のかよふらん
雪ふみわけし小野の古道　平時村

新拾九
夜嵐のふかしげき世にまよひても
なほたどる小野の古道　権少僧都道順

増
やこなれと月のひかりぞさしてける
うの花さけるをのゝほそみち　基俊

千六
さ葉なる小野のかやはら紅にて
みるも露乃たりまさるかな　在原乃季

渡

比はら小野のわたりはいつくらん
冬まちかねて尽しもえやさき　桐桧

篠原　加賀　近江　有同名　或云野歟名也

古十一
あさちふの小野のしの原忍ふれと
人しるらめやいふ人なしに　読人知

後十
あさちふの小野のしの原しのふれと
あまりてなとか人のこひしき　源等

新古十
虫も枯は中々をかるみそて
風のをとくる小野のしの原　俊成女

新勅七
あはれこ乃尽もやとりもしのゝ露は
風のみきしくをのゝしのつゝ　家隆

同五　松虫
思ひまとをの篠原をく露に
あまりてされをは松虫のなく　同

千五百番
葛かれや小野のしのゝつゆ袖は
露にをしつ袖は今もしほれて　定家

新六
霜かれの小野のしの原けさこれは
あまりをしなきて風そふくらし　光俊

続古四
夕されは露吹わたる秋の世に
草葉にうつるをのゝ篠原　衣笠内大臣

続古今
雁

思ひねの夢やこゝろんさ渡しかれ
なかゝゝもあはれ小野の篠原
左大臣

同十

露しけき小野の篠原いかに又
おもひそ旅乃袖ぬらすらん
藤原□□女

続拾四

風の音もいつつかん秋すゝき
まねくあきちの小野の篠原
行能

同

虫の音も秋見ひとつの秋風に
露わけわたる小野の志の原
俊成女

同
雲居

夕されは雲間に雁なきて
秋風さむしをのゝし原
藤原□□女

同九

旅人の宿りかりころも袖さえて
ゆふ霜むすふ小野の篠原
定為

新拾三
時雨

たつねはや小野の志の原思ひをも
あまりなにとしくる時雨か
花山院内大臣

同四

風そよくをのゝ志の原霧こめて
露さけぬるゝ袖のなみたか
法眼慶融

千五百番
月

今はとて浅茅かれ行霜の上に
月のみさえしをのゝ志の原
忠良

野分

かりはすゝきかりほそよきてあきかれ
野分にまよへる小野の篠原
家隆

上野

或城西大原野在之 但城小大原現在之

万代

春のくるまたれそかする大そかれ

萩

万代 芹生里

うへ野の萩まきうつしたるさと　仲実

世の中をいとひてはいりし大原や
せりふの里の萩の露けり　後徳大寺左大臣

拾十七 女郎花 嵯峨野 山野原

ここにしも何にほふらん女郎花
人の物いひさかにくき世に　僧正遍昭

千四 薄

花すゝきまねくはさりとしるらめや
そてまて物いふこゝろたのまれ　道命法師

新六

いさゝらは袖よりをきてんをみなへし
此世のさかりは秋のさかりゆ　光俊

続古十六

まねくとて秋のさかりをしる露は
さらにや人の袖ぬらすらん　入道前摂政太政大臣

同返

まねかれてもうきは身にそふさかなれは
こゝ世の露乃かゝるまそなき　為家

右二首前中納言定家身まかりて
後第三年の仏事冷泉の家にて
し侍りける時の贈答

新拾十八

今はよしうき世のさかと思ひぬるを
又とまる山寺宿はなかりとめし　顕意上人

夫木春日社百首

春日野は子の日わかなの春の跡
みやこのさかは秋萩の時　後成

国立公文書館 National Archives of Japan

くちぬへし心ひやうたにかゝりけり
うき身のさかの秋のたのみは　為家
右前中納言定家卿まゐりて後さかの
家に住侍りける比法眼覚寛おもひやる
秋まてとふらひ侍れ秋のさかのゝし
けさの露とりて侍るよし也

後十五

山

さかの山みゆきたえにし芹河の
千世のふる道あとはありけり　行平
右詞云仁和のみかとさかの御時の例にて
芹河に行幸し給ひける日となん

新古十七

嵯峨の山千世のふるみちあとゝめて
又露わくる望月のこま　定家

続古六

大井河乃波をもむかしにかへりけり
こゝろさえせぬさかの山風　後京極摂政

野

後拾一

小松ひく嵯峨野にてあそひしおもひそん
さか野をとやまし去年の日と　賀茂成助

家集

秋ことに大宮人乃こゝろ嵯峨野遊ふ
さかのしとや人まつらん　花を　俊成
右一首嵯峨野に殿上人のあまた
出ておほくの女んさいなりはをかくかく

家集
めにちかくみるかきりは安羅能
あまきみれくさをしかなれとも　元真

新古八
さらてたに露けきさをしかへにさて
山しのゝはらしるしにわかるゝ
みしさは秋のさをしかのなくらむ　権中納言俊忠

月
蓮
なかよはきさをに絶をやあらん　後徳大寺左大臣

今はたゝうき世のさをへたつとも
露きえてたえし跡しるの月
　後徳大寺左大臣

続拾五
露なれや袖にやとれる安倍郡(?)
さを野の花もこぬ人のため　陽明門院

続古八
鷲乃山二つにわけのうつりさて

嵯峨山　月
はりまの露にあかすの月　寂蓮
右清滝寺まてまかりてよみ侍りし

月
名にめてしさをしかの嵯峨のをとなし
これもかたひのさとしるしまや　太上天皇

新拾七
篁
あはれ世をうらみのうらの露かくく
ともに泥源氏の名乃さゝ原　土御門内大臣

名所百首
狩人
狩人の草にかけ衣かりしもあへし
秋のさをしか乃よるも鳴しるかな　順徳院

増
見るせいさしも枯野に成にけり
いまはをくらは紅葉ちらなん　師兼

新六
うくつれさ秋のさをしか鳴さきさき

二ノ十三

名所百首

あきのたれとも色露やかもあぬ
なかとも秋乃さかのいかりより
床さ草葉れ露まなれけて 為家

原

六百番

さか乃原たしほらてもれるらあるへ
まふのみゆきさまくれならん 経家

同

きくれなくさかれ原乃ふゆきさへ
かうきさ路をやまつけわれらん 兼宗

家集

君と我ゆきあふ名をよしくもは
さかの原もあはせてしか 元輔

野宮

拾八

こと乃ねにミねの松風かよふらし
いつれのをよりしらへそめけん 斎宮女御

同

松風れをとにみたるゝことの音を
ひけハ子の日乃心ちこそすれ 同

右二首野宮にて斎宮の庚申し侍るに松風入夜琴と云題をよめる

新古十六 寂蓮

たのもしな野の宮人のうふる花
しくるゝ秋にあへすなるとも 源順

続古七 神宮

榊さす葉山の風の乃ことしく小
すゝしきをそふる宮のしらゆふ
右宮のかけも野宮にそ 宰相典侍

古五

大澤池　寛平菊合名所第二番

一もとゝ思ひし花をおほさはの
池のそこにも誰かうへけん　友則

右詞云大沢の池のかたに菊うへたるを
よめる

後拾十六
猶ねなくれ猶ね名の影く立かはれ
此お月さへのいろしや世に　後入道

大和物語
大澤乃いけのみくさたえぬれと
なまりうらゝ山さりれつゝきと

正治百
大沢乃池の影しさハありけれと
りんしんきめる秋の夜の月　後徳

家集
右河原きめをかゝしてよめる
いにしへの月しあへハおほさはの
いさりひかりとてたゝらむ　兼真

廣澤池　八雲御抄云 大沢 廣沢 已上二ハ同名也

六百番
歴谷寄月
ひろさハの池にハ老の月影の
遠き山のはにゆくか　中務卿親王
宗尊

月
心より雲井ちかくあくかれし
ひろさはの池にさそふ月　定家

月
なかめやる心のはてもしられしや
月に宿かるひろさはの池　基家

月
更級
明月
さ[illegible]ゆきはたてヽいさなひきて

月のひかりひろさハ乃池　兼輔

言葉

こゝろえぬむかしにかへらぬかゝれ
月はなをりし山のかゝろ澤の池　法性寺
摂政

宝治百
五月雨　澤松

五月雨はこぞしの森の緑浪こえて
みさおにうつせる唐澤の池　隆祐

新宮歌合

風ふけはみぎはひろさ草まよひて
月はなかゆくひろさはの池　季経

新六
根尊

秋の夜は月をながむる人さへも
猶ぬるみぬる唐澤の池　信実

新拾十九

花でこそ我みけのこゝやかゝるらん
むかしかはれるひろさハの池　天台座主
慈雲

重之集

ひろさハの池はうらしく雲ゐ
すこし吹く風に浪さきかくる

堀河
千六

廣さはの池のつゝみにやすらひけ
みかゝくかく菖蒲りかみ　為家
心ありて淡くしらずひろさきまれ
なかれいまさてさしられぬよ　源俊頼
波けハみさえの宮も清かまし
こゝろありてまことの池なり　守覚法
親王

右一首遍照寺にて池亭宮とゝ有んと
まを侍りけるん
いにしへの人はみさりしかもとして

月のよすからいろさえの池　兼政

右通題にて月を見てよめる

大井河

古今 賦哥
まふ人をこふるこゝろは大井川 たえすしてゆくにおとしきりけり

後十七 篝火
大井川うかふる舟のかゝり火に をくらの山も名のみなりけり　業平

拾三 紅葉
いろ〳〵の木の葉なかるゝ大井川 しもはかつらの紅葉とやみん　忠岑

同八 松 行幸
大井河かはへの松にことゝはん かゝる御幸やありしむかしも　貫之

同十二 筏
大井河くたすいかたのみなれさを みなれぬ人もこひしかりけり　読人しらす

後拾五 瀧
水上にみなきりおつる大井河 むしろはとなせの瀧のしら糸　堀河右大臣

同
名もたかくみなきりおつる大井河 こゝのゝみちは海となれとも　定頼

同六
落つもる紅葉をみれは大井河 井せきに秋もとまるなりけり　公任

同
大井河ふるきなかれをたつねきて あらしの山のもみちをそみる　白河院

同十六
まれにきてみるよのさかは大井河

拾遺十八
たのもしないくよをへてか大井河
うしとにせくとはいはしも大井河
馬内侍

家集 続拾八
むかしのみなかれてかはる白浪の
源道済

同
もみち葉乃ちりてなかるゝ大井河
せゝのさゝ浪けさゝめなし
是則

同
大井河うきま山風のさむけきに
いはうつ波を宮しきりなる
光臣

同 瀬
大井河めくる小舟のかよふ瀬を
まのあたりへたてゝかへるらん
元真

同
夕されはいとゝかはしき大井河
かゝり火たにもやきつゝそゆく
順

二ノ十八

同
大井河みな瀬のさむけきを
よ河いそ波も雪とのみこそ
同

同
いろかはるあけのそなたを大井河
みなれそしつるものゝ人々
能宣

増古 鶯
大井河せゝにひゝきのゆへを
こゑはいまそなきつゝわたる
野守

同 千鳥
大井河そよいなさにそなきて
井せきにさはちとり鳴也
師時

同
大井河みなせさかまいて瀬に
さむいりかさきみゆる
俊頼

全二
大井河いかせうかへて月のさやけん

雑秋

ほのまたらぬかはせの秋　中納言雅定

金三
大井河岩浪たかしいかたしよ
きしのもみぢにあからめなせそ　経信

同
大井河井せきの音のなかりせハ
もみぢをしけるわたりとやみん　顕季

同
大井河ちるもみぢ葉にうつもれて
となせの瀧ハをとのみそする　大中臣公長

同七
大井河もみぢをとむるいかたしハ
さをにはにしきをかけてこそふれ　平致親

千五
大井河なかれておつるもみぢかな
さそふハミねのあらしのみかハ　道因法師

六百番哥合
いかだしのちるをつもれるかり大井河
なかれもやらぬ紅葉なるらん　兼宗

千五百番哥合　月
あらしふくこすゑハあれて大井河
木の葉かくれにやとる月かけ　家隆

新古三
大井河かゝりさしゆくうかひふね
いくせに夏の夜をあかすらん　俊成

同六
いかだしよまてこととはむ水かみハ
いかばかりふく山のあらしぞ　藤原資宗朝臣

同
ちりかゝるもみぢなかれぬ大井河
いつれ井せきの水のしからミ　経信

同
たか世ふねしてゝいかにまもみちもの

雑

なかれくるもろおほ井河のる　家隆

同十三
大井河かゝりのほのまくらにも
きえたのめしうれしやあらぬ　元輔

新勅六
大井河ちるふ紅葉乃みしきとへ
波のこゝろは浦ゝせくやらん　九条太政大臣

同
紅葉乃あられもやらぬ大井河
河せもたえみのきまよりこそけ　権中納言資経

同七
大井河きよのこゆきかくしなりや
ちとりふてらひまこえるらん　前中納言伊房

同十三
大井河のみぞれよふもむかれや
きふられるとさなけさまそすか　実方

同九
大井河もろきいろかゆらぬかき
みちえて瀬もひのこけりられそ　大炊御門右大臣

新六
大井河たまはなみのかなしめは
ふるきことゆきの跡をあらひよ　衣笠内大臣

同
大井河のみち敷しく秋の月
ちとりきみゆきも跡あるし　為家

同
大井河すなこのこれ乃みなをあれと
川とめてかきいりし　信実

同
大井河浪に河せき乃あとのは
とりのさるかぬかしとも　光俊

続拾
大井河まれのこゆきゝとゝへかる

続千八
かみのみちの江ハおりなから　定家

大井河風のしからみ見えくなり
すみちのいくたびゆきやちねまて　円(?)入道摂政太政大臣

同七
大井河つねよりことにこゆれ
岩ゆみゆきをもかまてなる　土御門右大臣

続拾六
大井河すみちの名にかなふとも
わかきなかれの江にこゆん　順徳院

同四
すみちまうた入江乃松をたちぬまと
千世のことぶき乃江ハ見えなり　光明峯寺入道

同十一
大井河かきのせをこして行水の
さしまも神もおもしろかる　従二位家隆(?)

同十八
大井河のとまも見ゆるかめ山乃
うちつぬまけハ世へぬらん　中務

同廿
大井河千世ふえてひきむ水の
きよみのころゆきおほけるる　直房

続拾六
大井河ゆきさに秋の色とめて
これちよせ千せ乃岩波　太上天皇

同
我なれ共世々の大井河
さしぬ御ゆき乃ほをみるかな　具親

新拾九
大井河ゆくせの浪もおもしくは
むかしまくされ君かかけらん　法皇(?)

同六
わすれてもちけし大井河

君まさて宿乃こえぬなれは
大井河杜のなかをそ河ふねも通ふ　入道前太政大臣

入江

入江の水にしつむもみちを
大井河なかれもやらぬ木葉かな　常盤井入道

十月

大井河かくれぬ秋のなこりみえけり　左大臣

弘長百首　五月雨

大井河をちかたかけてゆく雲の
をとこの山乃さみたれの比　為家

四条太皇太后宮歌合

大井河瀬つせもなく秋ふかく
もみちの関となりにけるかな　大納言長家

寛治二年十月　大井河御幸時

大井河ゐせきにとまるもみちして
立くる波もあらはれぬる哉　白川院

弘長二十首

秋霧乃構たなひく大井河
岩根もうつる木のもみちかな　後嵯峨院

杜頭紅葉　家百首

大井河山のもとをそめて流る也
うつりてあらしもあらそうらん　為氏

前中納言定房家百首会

大井河まさる夜な夜なきえしてハ
かせきよくもみちやかりてきえつらん　読人不知

建保二内裏百首会

大井河岩こえくるもみちかな
ひとりあらしの山乃秋風　定家

寛喜元年十一月入道殿屏風

大井河もみちのみなとあへて
かさたかきかつらの秋の風　家隆

承保三年十月　大井河逍遥時

いまはしへの波をしるして大井河

永保三大井河行幸日

紅葉の御舟よそひのさかり
水のあやをとるゐまさりけて　経信

まきのこゆきはあらぬ紅葉にて
大井河まきのこゆきにかみちらし
をくらひはしきみを紅葉ちれこそ　公実

月

寛弘五 白河院 大井河行幸時

大井河水のみなかみ見えぬまで
ちるもみぢ葉のうへにすみける　権中納言経信

大井河岸よりさきうく松の
風やせの波をかけけん　恵慶

淀

秋もなをあらしの山は風さえて

大井のかはしだりかけて流れ行 雲

戸難瀬 河流岸 寛平亭子院名所并四首

増百 乃後

松風をのとにたせの水よみえさりて
ちるせのいかにちりつもるらん　匡房

金三 紅葉

紅葉めも四方に紅葉を散らして
となせそ秋のとまりなるらん　公実

千五 夕紅葉

いかばかり岩まによみて夕されば
みなせのいくつみちてけるらん　前大納言親隆

新勅七

大井河ふるきこゆきにかはらねど
となせの水よりもあをくすみける　太宰大弐

新古

五月雨は水まさるらし大井河

となせのみせきをとけかねてや　衣笠内大臣

大井河逍遥之時代人詠

となせよりなかす錦は大井河
いかたにつめる木葉なりけり　信教

建仁元五十首

杣舟みなせとなせのこまれ棹
さしもおなしくあらき秋すれ　後京極摂政

となせよりなかるゝ舟のこまれ棹
舟をひきとむるみなれて花　信教

新勅十三

河

となせ河岩にしくたむいかたしや
波よりさきもみねをまつらん　信成

続古六

となせ河たきつ瀬ことにつゝきて

これそこのみちの関かなとなせ河　堀河左大臣

続拾五

せかれを河のみちをくたすとも
よとまぬ水は林そなれゆく　後鳥羽院御製

新拾十三

戸難瀬川こゝろのうしのこまれ棹
さしてたのみしかれそこなる　法眼源承

眺望河原逍遥之時

となせ河玉ちる瀬々の月をみて
こゝろそ秋にうつりはてぬる　定家

瀧

全三

大井河ちる紅葉しよりつもれて
となせの瀧もこそのこゝちする　本院公忠

千十七

大井河となせ乃瀧よりいかたにて

続拾七

まゆとも人はいませてかれ　定仁法師

続古六

秋霧のたえまにさやかにみちそく
しのゝめ河山乃あらし也けり　有家

何しくて山わおろさのもみぢかな
さたせの瀬におもしてぞみる　経信

岸

桂の河きせのもみちはちりぬれは
さゝふせのきしにたなひく志ほのかし　恵慶

桂

河波里宮

いろ〳〵の木葉なかるゝ大井川
志もはかつらの紅葉とやみん　忠岑

後拾十八　宿

さと乃国にかつらのさとをこしゆへは
ちよ月の輪にそへきなりけり　条院讃岐

六帖　鮎

あさかくはるかみゆるかなしかも
何ゆゑをすとにさもかしくして　信実

日記

久かたの月のかつら乃もみちけれは
おしてるゆるかつらのかはの影　道命法師

新六

月なくして秋河はさかりかりにしも
秋ならぬかつらのもみちちりけり　為家

建保二内裏歌合

大井河志もはかつらのもみちをも
ひきてけおろしの山乃秋風　有家

大井河志もはかつら乃月かけは

みちさて我つらせしも
月のうられかはしの人をとふそ
面まなりなるのうゐてかすらん　土御門院
右一て伊勢の桃をとみ佛を遣雨
のふかくも月つかりしりとちらん

河

堀河百　信実
かつらて河月をゑやもる秋を　師時
まふよ山うなさ底よみへる
新古三　静朝母
久かたの中なる河乃うかひ舟
いかにちきりてやみをまつらん　定家
家集
かつら河月のひかりに水まさりつ

新六　拾遺
秋の夜ふかくたかのよそらふ　元輔
この河のうさかりけめしらる人
うなそふまきさまふるさと　光俊
詩歌合　柳　梅
かつらのや河ちかい柳たなみかけ
むあはいまやくまめきにみり　蓮性
続後十六　花　岡
春つら河のあらし花乃名をなし
こきのよ乃渕そまふかき　家方
文永二年九月十三夜仙洞五首合
久かられあらてる月乃かつら川
秋のこよひのなにたかれつ　山階入道左大臣

渡

万代
まつねとも久つかすかとさくらに

賀茂宗夢

かもかはのまつりはあかはしつらん　元良親王

里

古十八
ひさかたの中におひたる里なれは
ひかりをのみそたのむへらなる　伊勢

全三
こよひ我かつらのさとの月をみて
おもひのこせることのなきかな　経信

續後八
さえゆるかはらのさとは河よよ
ちとりなりてや月をまつらん　藤原清範

續古五　持統
久堅乃かつらのさとのさよころも
おりはへ月乃みおよう川かり　定家

新後五
わきてなをひかりをそへて照月乃
かつらのさとに秋風そふく　入道前太政大臣

同十八
なかめつゝころのやとをちかけれは
かつらのさとをすみかへる月影　権中納言俊忠

建長元年九月十三夜五首
里のなもひさしくなりぬ長月の
月のかつらは輝のこゑはい　為家

弘長
久方の月乃かけに見えゆかれ
かつらのさとにさよ中の秋　讀人不知

里の名は月のかつらにすめる
かつらのさとやひかるらん　月

宮

古十
秋くれと月のかつらのみやはなる

ひかりを花とちらしたりかも　源たゝこそ

亀山

古七　滝

かめのおの山の岩ねをとめておつる
滝のしら糸千世のかすかも　きのこれおか

拾六　離別

かめ山にいくくすりのみありけれは
とゝむるかたもなきわかれかな　戒秀法師

家集　子日

ゆくすゑもかきりなきよは神のひかりに
ちよの松ひくかめのお山　忠見

同

月人はちとせをさくらもかめ山の
めくるよそひのたまゆらかな　同

同　新葉

亀山のいさかけはへのみちたく
ちとせ松そうかゝるへしたり　経宣

同

かめ山乃こゝろをうつしゆくみつに
こゝさら舟いて代へめくらん　貫之

千五百番

四の海おさまれる世ハをさまきく
かめ乃お山も浪そよせこん　顕昭

六帖

大井河かせきよみせるかめ山の
いのちなかくもあひみてしかな

良玉　祝

かめ山はさるさくらのえにいまそ
流くも君をいのりつる哉　経任

万代

亀山乃松のみとりくさ橘もし
大井のさはなかれてかへる　好忠

夫木五 綠洞

亀の尾のみねの洞にかよふらん
我らの下のかつらのひかりは
為家

續古五

かめのおのたき河波にうつりて
千世のかけみる秋のよの月
大納言通成

同十八

大井河ちとせもかはらぬかめ山の
かけをうつしてかはらぬ月かな
中務

同九

行末もすむへき久しきかめ山の
さくらは色をちらさてそなれ
伊勢大輔

續拾十

よろつ代をかめの尾山の松かけを
うつしてすめるやとの池水
太上天皇

同

かめのおの山のかひある山さくら

よろつ代にほへきためしそれならん
洞院太政大臣

同

名にしおふよろつ代ふるき亀の尾の
山のさくらハおなし色なり
權大納言經任

新後九

亀のおの岩ねをおちてすむ水の
かそへしられぬ千世の行末
後嵯峨院

同

君かためかめのお山の瀧川の
千世をこそまさる波のかけるらん
左兵衛督入道

山階入道左大臣家十首

千月すむいつくはあれとかめのおの
岩ねの松を君そひくへき
為家

攝政家 小松

よろつ代のためしにひかん亀山の
すそ野のはらにしける小松を
西行

かしきゝのうへなる山にかれて
ちらはかさねよ露の毛衣
土御門内大臣

嵐山

拾三 松虫
こよ人も今はあらしの山かせに
人まつ虫のこゑそかなしき
読人不知

月 五条
朝またきあらしの山のさむけれは
紅葉の錦きぬ人そなき
公任

後拾六
大井河ふるきなかれを尋きて
あらしの山のもみちをそみる
白川院

増古
花さそふあらしの山乃さくらはな
ゆきのさそひにちりしきそする
師兼

金三 康
世の中をすてゝやさしきしもの
いまそあらしの山にたくらん
忠仲

十五
ちりまよへはあらしの山は大井河
紅葉ふきおろすかけそなかれ
俊恵

新古五
なにほとにそてをぬらして紅葉ちる
あらしの山の山のふかくなるらん
前宗輔平朝臣

月八
うき世にはあらしの山の山風に
これやなにゆへしめたらん
俊成

月十六 月
すみなれし人もあらしの山乃はに
花さそふ入し在明の月
法印静賢

続後七
秋かせにちりしくもみち大井川

続後拾十五

みなせ川山のあらしのかよひちより有家

むかし見しあらしの山はさくらなれ　雅経

続古今六　芦

木葉のきはにちりかゝりけり

紅葉のあらし山のかけたかき川の瀬は　太上天皇

波よりあらしのをとはさむけき

同十八　紅

かはとの秋のあかつきあらしやま

おほゐ浦をてわたる瀬つきを　月

続拾四　秋

朝ぼらけあらしの山は峯はれて

ふもとをくだる秋の河きり　為家

同五　紫

あらし山もみぢの色やさかりなる

志らくもはきえてとまらむ　前中納言資平

同

あらし山峯の月ハくもりなて

川せのなみそうきてみえける　太上天皇

同　秋

吹はらふもみぢの山をあらしやま　山階入道左大臣

まさ木葉のちらぬまにとて

建仁元八月十五夜歌合　麓寺

又たぐひあらしの山のふもと寺　俊成

杉のいほりにありあけの月

承仁二八月十五夜十首歌　擣衣

夕ぐれはかねのひゞきもあらし山　為通

くもりきえてもぬる月影

亀山院御年祈河付三首歌

をのつからたえぬなるあらし山

かはさうそなれくる木葉　為世

亀山殿十首

春秋のみゆきされしやあらし山

拾

おちつもるさくらの丈にすらなん
大井河きしもへつるもみぢとも　忠見

ひと川あらしの山の松風　有家

建保二年内裏歌合
ちりまがふあらしの山の紅葉〻
ふもとの里はなほやさむけき　中納言雅家

永暦四年内裏歌合　禁里
いふかたへもあらしの山の紅葉は
井せきにとまる色もみえけり　周防内侍

右一首寛治六年十月殿上の歌合に
大井河にまかりて紅葉見侍る時
人をうらみてよめるとなん

治安元年百首
あらし山もみぢさへこそちりけれ

こぬもやまたしられて　為氏
嵐山ちりしく花のまつ木をまて
ひと川にかゝる花の志ら雲　同
春のゝあらしは山のさくら花
ちるを見しまぬ花にぞあらむ　鎌倉右大臣
夜もすがらあらしの山に風さえて
大井のよどにこほりしにけり　西行

増
小倉山　藤野ゑ里寺　祖野里
見る人もせい瀬瀬も寺を成むり
いまはをとしに葉ちるらし　師時
住うき山志らしをくるれ宿のえく

こゝろまてすむ春の夜の月　中納言公雄

右一首小倉の山庄の外なれ共
山まてをもかれならぬは右に書月と

山

古五　康

夕月夜をくらの山になくしかの
こゑのうちにや秋はくるらん　貫之

同十

をくら山みねたちならしなく鹿の
へにけん秋をしる人そなき　同

後四　時雨

いつきえんをくらの山乃かけにまて
おもひつむるしも袖をれよなく　藤原師尹

同八

春ちかくふりしく雪はくるやと

容

こゑはする花のさかりかなかりけり　読人不知

同十一

大井河うかふう舟のかゝり火に
小倉の山も名のみなりけり　業平

拾二

あやしくも鹿のたちとの見えぬ哉
をくらの山に我やきぬらん　平兼盛

同 [illegible]

みなせにはあくたかはらむ小倉山
秋まかとの名にこそ有けれ　読人不知

同三

紅葉ゝをけふはなをみむ暮ぬとも
をくら乃山の名にはさはらし　能宣

同十七

小倉山みね乃もみち葉心あらは
今ひとたひのみゆきまたなん　貞信公

後拾四 秋

小倉山たちどもみえぬ夕霧に
つまとはせる鹿そなく也　江侍従

金三 秋

をくら山みねのあらしの吹からに
谷のかけはしもみぢしにけり　兼季

同四 冬

神無月しくるゝまゝにをくら山
したてるはかり紅葉しにけり　源師賢

家集

秋の夜は種なりまさりさやけきを
いかでをくらの山といふらん　是則

同

人しれてちらまし山乃かひもなき
をくらの山はかみなかりけり　元真

同

まよふかれいをくらの山は紅葉ても

うこきくてらて見てけるらん　躬恒

夏 照射

ゑとぬのゝ鹿乃くるゝひもなく
小倉の山にともしとれすか　師時

千四

松ふるも知れ夜や人のあかすらん
をくらの山をてらす紅葉て　左命法師

新古 月

いつまかこよひの月はくまりなき
をくらの山も名をやかふらん　大江千里

同五

なく鹿の声とのみきくをくら山
霧たち渡る時しなけれハ　清原深養父

同六

いつとなき小倉の山はかるきをとて
これやまた人のいそくなるらん　左令法師

千五百番

春しかも声きくこそや志のみかしこきよす
をくらの山乃そまたつらさかはく
家隆

新勅四

小倉山ふもとをこむる夕きりに
たちもらさるゝ小男鹿の声
西行

同五

我庵は小倉の山の近けれは
うき世をしかとなかぬ日そなき
八条院高倉

同

かきしつあれハいつくハ多れすまへき
ありそ志く濱をくら山かな
西行

同

霧時雨そめてもはかなをくら山
きのふやよしかの峯の紅葉葉
従三位範宗

続後五

妻こふる鹿のなくなるをくら山
これ乃秋風さむくなるらし
長家

同七

小倉山みねて秋まにあき風乃
身にしむとしや鹿のなくらん
藤原雅定

同

小倉山しくるゝ比のあさなく
きのふはうすきよもの紅葉葉
定家

同

いにしへのあとをたつねて小倉山
こゝろのもみちやわきてちるまし
太上天皇

万九 続古五

暮(ユフ)去(サレ)者(ハ)小椋(ヲクラノ)山(ヤマ)爾(ニ)臥(フス)鹿(シカ)之(ノ)
今夜(コヨヒ)者(ハ)不(ス)鳴(ナカ)寐(イネニ)家(ケ)良(ラ)霜(シモ)
舒明天皇

続古五

をくら山秋はかたしかひとたく葉を
いつよりもよくゐなれてきく
為家

續古五
明ぬとも見えかつの河音れ
きさらぎ小倉の山のかけにハ
関白右大臣

月
此里ハ川霧ふかくみをつくし
外ま見るねにその紅葉も
小倉山いまつはいまもあはれなき
衣笠内大臣

月
こゝゆきまに川音のみやすらん
光俊

月十八
露霜のをぐら山に家ゐして
ほさても袖のくちぬへき哉
定家

新古
夜河 雅大
をぐら山嵐川の水の世をたちやと
のかれハこゝろかゝりの秋
知家

續拾十一
さ嵐しのあすハ外もをぐら山

夕日のかけは松にかくれぬる
為氏

新後四
こゝやこれよそにきゝつるをぐら山
みねの松やとふもなくや
津守国冬

月文
名にしおはゞさらでもなくや小倉山
いはくらにおひの身をくさまし
為家

月
世のうきをておもひをぐらの山の名の
いかにふかれはまさりなん
公雄

廣田社歌合
あらしふくたゆるやしぬらん小倉山
あはれなくねま月かくさね
基俊

弘長百
大井河ゐせき雨さかたりぬる雪かれ
をぐらの山のさえぬれの比
為家

続千載十首歌　為相

小倉山秋の木末乃うつり行色
いまいくかありて冬はやきなん

宝治百首　為家

小倉山かけのいほりハいはまくら
せく谷水乃音まされやハする

拾遺愚草中　山家松　定家

忘れなん松ともなしそをくら山
軒の松かせたえて久しき

遠近三仙洞詩歌合　為氏

をくら山峰のあらし木の葉ちれ秋風に
あれてのこる有明の月

清輔

をくら山ふもとのみちもれかれゆけん
こゑのあし乃およひもしらす

鹿野邑

新古今　花薄　読人しらず

小倉山ふもとの野へ乃花すゝき
ほのかにみゆる秋の夕くれ

千載秋歌　萩　忠良

雲井よりふくのあらしやをくら山
ふもとの野への萩の上露

鈴虫　匡房

弱りゆく秋の人をまつ遠ハ
をくらやまにてなくむしのね

楳里　付寺

新古今　西行

小倉山ふもとのさとに木葉ちれハ
木すゑにはるゝ月をみるかな

和歌所にて山寺といふことを　後成

小倉山ふもとの寺のいりあひに
あはれをそふる秋の夕くれ

裾野―付里

とふやまはそ野のすゑまよ○きけり

こよひいさこゝに宿をとりまし　時房

里

小倉山すそ野の里の此夕こそりは

やとしつかへし○夜は川なり　須涯浣

国立公文書館
National Archives of Japan